

同く曰く。此亦、君夫の魚を親るに、常の時と異なる。孰しは其の志を聞かんや。婿子討へて曰く、  
古の人の言はく、少人こそ其の娘を、死ぬは岳を首にす。と。僕、虚談と以して、今斯水也るを  
待す。女娘同きて曰く。君等の人と欲すか。婿子答へて曰く。僕達親戚の俗を譲れ、遠く神  
の標より、忠告を忍び、輒々轉た慮を申す。望野は本の俗に還へり。二親を拜り奉る。  
と。女嫁漢を城に、歎きて曰く。意は金石に等しく、共に五歳を期せしに、何ぞ御里を奉るや。  
一時に棄て遣めん。と。即ち相携へて、俳個人、相譲りて、樹哀く、遠に袂を揮へて、退り去る。  
波に就く。是に於て女嫁父母と親族と、思ひ別れを悲しみて、之れを送る。女娘、玉運を取  
婿子に授け、謂て曰く。君、終に嫁を遠れ、養母を尋ねる有らんを在る。但、遠を握  
り、見しめて、聞き見給ふも、と。即ち舟を舟に乘る。仍ち目を眼で教むるに、忽ち本土の  
筒川に到る。即ち村邑を曉眺むるに、人と物と遷り易し、更に由る所無し。而して、御人に問ふて  
曰く。水江の浦の婿子か、家人は今何處に有りや。と。御人答へて曰く。君は何處の人なりや。昔遠の  
人を討ふ。吾等、古老等相侍へて、白ふに、先の世に、水江の浦の婿子有り、独り大君海に赴く  
復た其の妻を、公の三ノ権威と終り、河津忽に此の事を問ふや。と。即ち舟を御みて  
御人とも、と。雖も、一の親にも、今はず。既に、舟月に、退る。乃ち、玉運と、神女と、感思ひ、

是に、婿子前日の期を忘れて、忽ち玉運を問ふに、即ち、未だ曉る間、其の、前、体、風、雲、  
蒼天に翻り、我かき。婿子即ち期に乘り、遠へ、還るを要り、復に、今、難きを、知る。首を、廻  
り、  
蹴踏す。涙は、潮に、併、個、に、  
斯くして、決て、  
杖、  
喜、  
む、  
て、  
曰、  
く、  
常、  
世、  
に、  
雲、  
を、  
去、  
る、  
水、  
の、  
江、  
浦、  
島、  
の、  
子、  
言、  
持、  
ち、  
去、  
る、  
神、  
女、  
遠、  
か、  
に、  
飛、  
龍、  
が、  
サ、  
方、  
に、  
音、  
に、  
あ、  
り、  
て、  
曰、  
く、  
大、  
知、  
に、  
風、  
鳴、  
り、  
上、  
り、  
雲、  
霧、  
小、  
退、  
き、  
居、  
り、  
と、  
も、  
吾、  
を、  
忘、  
り、  
ず、  
有、  
婿、  
子、  
更、  
に、  
悲、  
に、  
勝、  
れ、  
ず、  
喜、  
む、  
て、  
曰、  
く、  
婿、  
子、  
に、  
恋、  
ひ、  
朝、  
戸、  
を、  
開、  
き、  
己、  
が、  
居、  
る、  
は、  
常、  
世、  
の、  
海、  
の、  
波、  
の、  
音、  
聞、  
ゆ、  
後、  
の、  
時、  
人、  
追、  
ひ、  
加、  
へ、  
て、  
曰、  
く、  
水、  
の、  
江、  
の、  
浦、  
島、  
の、  
子、  
玉、  
運、  
剛、  
け、  
ず、  
あ、  
り、  
て、  
は、  
又、  
も、  
今、  
會、  
は、  
す、  
と、  
常、  
世、  
に、  
雲、  
を、  
去、  
る、  
鍾、  
原、  
な、  
り、  
は、  
繼、  
の、  
女、  
我、  
の、  
悲、  
を、  
去、  
る、

昔、竹取のつねといふお取さんが居りました。

野や山に行つて、竹を切つて煮るは、其れで生活を立て

ました。

或日、何時もの様山に行つて竹を採らんとすると、木

の方が光つてゐる竹が一本ありました。『あれな。』と思つて

近寄つて見ると、竹筒の中が光つてゐるのを見ました。

其れを切つて見ると、中に三寸ばかりの可愛らしい

女の子が居りました。お取さんは、『是れはやうと立

派な人にお成りになられる方に違ひない。』と思つて、大

切に年の當りに載せて、家へ歸りました。

お波女さんに言ひ付けて、此の子を大仕事に立付ました。

二月許経ちますと、もう一人前の人になりました。

ので、名を、かぐや姫と付けました。其の美しき事は、  
目も晴むばかりで、お家の中もひかしく光つて神々  
しくござぬまうた。お女取さんも、お波女さんも、大層喜  
んで、明け暮れ暮れも、にこ／＼とおまうた。  
世間の人も、珍う／＼おつて、大勢見に来ました。  
でも、かぐや姫は、ちよつとも外の人と、合會をうとは致  
しませんでうた。人々は、一層「己こそは、姫に合會してや  
う」と、晝と言はず、夜と言はず、うるさく押寄せまう  
た。けれども、姫は嫌つて、ちよつとも合會ひません。  
お女取さんは心配して、「良にお姫さんを迎へなせれば、  
と心配して、どう／＼姫を立派な方に入會はせ度いと  
苦心／＼しました。が、姫は、「私がかうして居るのが一番樂  
みです。」と申して、家の中に引籠つておまうた。  
明け暮つた家の中も、晴く／＼お女取さんの顔も、目も  
かちになりまうた。

此の事を、時のお殿様がお聞きになり、「其れは珍  
うい、姫だ。」と仰せになつて、腰元を激呼になり、「入會  
ふ事ま為ない、かぐや姫とかは、どんな女であるか、行つて  
見て參れ。」とお言付になりまうた。

腰元は、姫の家へ行つて、お殿様のお言付を傳へて、  
合會つて見よう／＼と申した。が、姫は、「御言であつても、此身は  
どう／＼お合會出来ませう。激呼に掛付いたとお外口を惡  
けて、たとひ殺せぬる／＼も、嫌でござぬまうと、取合  
さうに申しまうた。腰元は、「其れでは、致し方ござい  
ません。」と申して、歸りまうた。

此の次第を、お殿様に申し上げまうと、「其れでは、

わくが行って人會つて見よう。」と仰せられ、獵に出られる。お  
お婆さん、ほんの少しの家来を連れて、人目を忍んで御  
出掛になりました。

かぐや姫の家へ御着になつて見ますと、黄金色の  
の光に圍まれた美しい娘が居りました。お殿様は  
「是れこそ、かぐや姫にちがひない。」と御考になつて近  
づいて姫を御覽にならんとなさいました。侍と姫は  
両手で顔を西後つて、奥の間へ逃げかゝるまゝに  
た。お殿様は、世界に二人とない美しい姫だと御  
思になり、追ひ掛けて袖を掃へました。「逃げよう  
として、許しません。お殿へ連れて参ります。」と言  
きお鋭く由りました。

すると、急に姫の泣き声が滴えて無くなつてしまひました。  
お殿様は、ひっくりなつて、是れは、唯一人はな  
と、お言ひになつて、残念に思つて、よんほりお殿へお  
歸へりになりました。姫は又元の美しいお婆さんに返りま  
した。

之れからと言ふお婆さんは、お婆さんもお婆さん、姫の  
身に変わった事があるとはと氣を付けるやうにな  
りました。

初夏の十五夜の月が澄み渡って、地面に落ちた  
樹々の影もくつきり浮んで見えまゝだ。  
かぐや姫は、櫛の櫛干に倚り添つて、沈んだ面  
持で月影をちつと眺めておりました。  
お婆さんは、姫のお姿を見て、心配さうに、「姫は何を  
考へておるのですか。何故淋しいのですか。」と尋ね

ました。姫は、何も考へておるのか、はござおませぬ  
月を見ますと、心細くなって、愛するのですと申しました  
月の明るい晩には、空を仰いで、泣いてゐる姫の姿が、  
時々見つけられるやうにありました。

八月も半に近、月の晩でした。姫は、人目を取らず  
に、大鼓耳を擧げて泣いておりました。

お波さんは、涙を流すな、姫の手を握つて申  
しました。「まあ、何うしたのです。剣を配する

あるのですか。今度こそ、譯を語して下さい」と、お波も振  
く下申しました。

姫は、「月を見る度に、今晚こそ、お話をしよう。明日

になつたら、お聞かせようと思ひました。でも、お話を  
し上げませんで、今夜は、お話をしなさい。直ぐは、申

ません。申し上げます。私は、此の世の人ではありません

月の都の者でござおます。此の十五夜には、月の世界  
から、父が迎へに参ります。帰らなければなりません

それが悲しく、と、又大声を擧げて泣きました  
お波さんも、氣も狂ふ程、怒りまゝでした。「是れ

困った。何とかしなければ」と、湯水も咽に通らな  
いのでした。

此の事を、お殿様も、お聞かになつて、「それは、  
十五夜には、家来を大勢遣はして、月の都へ

来た者を皆捕へて、お波さん、お波さん、お波さん、  
二千人の家来が、弓矢を持って、二年に分れ、千  
人は、かぐや姫の家の屋根に上り、千人は、家の周囲

き取巻を以て守りました。お波女さんは、姫を抱いて籠の中へ入って隠れました。お取さんは、塗籠に籠を下りて、使の者が来たなり、追拂へてしまおう。と四方をうろたへておまじら。かぐや姫の家は、まじらへく大駭きで、月が中空に懸つたと思はれる頃、かぐや姫は、樂の音が聞えて来ました。金や銀や瑠璃をちりばね、綺麗な羽衣が、多々の天女に守られて静かに降りて参りまじら。家来達は、近寄つたら捕へよう。と、うろたへて、つかへて結構なておまじら。羽衣は、鼓々降つて来ました。風が、一瞬の風が、かぐや姫を掠めて過ぎました。後に、香が漂ひました。家来達は、不思議な熏りにおたはたしたのか、皆酔ひ、おまじら。矢を射る元氣もありません。

羽衣の舞が自然に開いて、父大王が降りて来ました。「早く此處へおいで。母の元へ参りませう。」と申しました。お波女さんの蓋も自然に開いて、姫も出て参りました。姫が捧げた天の羽衣を受取りました。「お取さん、お波女さん、最早羽衣を授けました。長い間、羽衣を著た姫は、一層光り輝いて見えました。大王は、姫の手を執つて、羽衣に乗り移りました。お波女さん、お取さんが、鳥が鳴り渡りました。天女達は、五色の羽衣を、まじら。風は、麻糸がせながら、しづくくと、天高く昇つて行くのでした。

お父取さんもお母さんもお殿様も  
来達も、うつとりと、何時迄も  
ぬまぬました。

くまなく晴れた五月空には、富士の峰が  
従耳えて、月の光に照らされてぬまぬました。

羽衣

一人の漁夫が、千重の好山に雲をちぢり、一穗の明月に雨初めの晴火の  
朝の光を眺め、三保の松原を歩き、行きました。

朝風の傍には春日知で、淡い霞が常盤木の杉並木を緩やかに流氷の  
を洗ふ波の音さへ長閑に響き、沖の小舟が茅葺かに浮いて居ました。

漁夫が春景色に見蕩れて居ますと、天空から美妙的な音楽が聞えて来  
迎り一面に紅白の花辨が舞ひ落ち、豊妙な薫香さへ漂つて来ました。

「此れは不思議だ」と呟きながら、辺を見廻りますと、老松の枝に見事な衣  
舞つて居ました。

道付して持つて見ますと、軽々とした茅葺か衣でした。「此れは珍らしい品  
持ち帰つて、年寄を喜ばせ、家の宝としよう」と考へました。

「若く、其の衣は私の物でございませう。其れならどうしてお持ち成  
りませうか」と、突然人妻が言ひましたので、驚いて見ますと、麓へ、乙女が佇む人

居ました。漢夫は、「此水は私が見付けた衣ですから、持って帰って家の室とく  
うと思ひます」と平然と答へました。乙女は、「其水は天人の羽衣と申すまい  
人間には用の無い品です。木の所へ懸けて置きて下さい」と気軽に申すまい  
「叔は此の衣は天人の物でございますか。世にも珍らしい品と知つては、  
室と務りませう。尚更返す事は出来ません」と大切相ひ抱へるのです。天人  
「羽衣が無くては翔けず事も、天へ帰へる事も出来ません。非心ようござい  
どうぞ、お返り下さい」と衣取するのです。漢夫は、「此水は貴重なる品だ。本  
才気は無いが、どんな事があるかも知れず、返すまい」と考へて、天の羽衣を午  
後に隠してしまひ、「何と解しやつともお渡りする事は出来ません」と、味  
く申すまい。

羽衣の無い天人は、羽衣の無い小鳥の様なもので、天に帰へるとしても  
此す、さういふ言つてお界には住むに任すまい。どうも良しものか、天人の  
も今は我が身に降り懸つたのか」と焦る念に鼓を打ち、情をこぼし、涙を流し

砂も濡すのでした。

任が馴れた深きい底まで降りては、立ち上つ白雲の行方を見詰めて、天に  
の迦陵仙逝の自由を羨み、夕暮の道かたを路を連れ立って、殿の雁音の行方を見  
送り、群れて飛び、囀り、千鳥の沖辺に、行くとも無く、返すとも無く、  
が悠揚と望み立つ有縁の、懐蕪の情に憂ひ、不運な身と哀れ、幾度と無く、天  
に地に泣き備す許りか。

此の哀情を地を見ても、漢夫は、「哀れなる御姿を見て、餘りに心痛はらう存  
の、羽衣を返して下さりませう。其の代り、静く聞き及んで居ります。天人の舞を  
見せて下さりませうと申すまい。天人は、「まあ、静し、事、お返り下さりませ  
うとございませ。漸く天に帰へる事が出来ませう。其れでは、宮廷管絃の形見は、月  
窓の舞樂も、御覧に入水ませう。然し、衣がなるとは舞はれませぬ。早くお返り  
いませ」と随喜の色を湛へて申すまい。漢夫は、「然し、羽衣を返して下さり  
なら。其儘天に上り、舞曲の妙音は聞かぬまい」と疑ふのでした。天人は、「



は人間の醜く、天人は信を以て本と致し、俗と申すものは天上界にはおはいません。と  
疑ふ由りなりました。漁夫は「嗚呼、漁取かゝる事と申すまい」とと新心愧の念に色を成  
して、お衣を返りました。天人はお衣を着ました。すると、何處からともなく立ち上った  
「雲霞が空を覆つて来たかと思ふ」と、笛に吹奏、舞に月琴の調子の妙を奏せられた音曲に数  
々の声も流へし、霓裳羽衣の曲の調も美しく、羽衣は浦風に靡かせ、落日の紅に染  
く流るの、汎々と舞の姿を富士に反映し、有り五色の裳衣に神技を見せ、次々と  
大空高く舞ひ上つて行きました。

漁夫は、月宮の三女の乙女の舞姿を五節の舞、此の神祕に惚れ、さうと  
て、天の清空の霞の中、清く行く姿に見惚れて居ました。

白砂青松の三任の精氣は、何時か蕙白の障に包まれ、腐子斑の白雲を頂つて立つ富  
士の言嶺が幽かに従身し、居ました。

謡曲 羽衣に惚る。 二一四六、三朋記。

一寸法師

昔、津の國の難波の里に、睡まじい夫婦が存りました。然る妻が四十の成り  
も子供が喜まません。で、たゞで、大志淋し、夫は任意大明神に祈願を籠め、  
子供を授け下さる様にと日夜うさました。するとお三年の十月に俄に産氣付いた妻が  
男の子を生みました。

其の子は身長一寸しか有りませんが、別に此れと言つて愛つた子でも無かつた  
ので、一寸法師と名付けました。

十三の年迄育ちました。知日舞は人並秀れ、居ました。身長は依然一寸  
寸もか有りません。夫婦は全くの崎形児かと思つて、「自分達は何んな罪か  
取で此の様な不便な子を授かつたものだらう」と言つて悲しくなりました。

夫婦は此の儘では困つた者だ」と相談して、「不便な身だが、何處かへ遣らうと思ひ、  
お前は修業に出る気は無いか」と尋ねました。一寸法師は、「湯西親の仰しやうと、無  
心事で、何處へでも参りませう。然る刀が無くては心細い次第です」と申すまいと、



継母が何と申しませぬので、腰元存じも付き末はせず、姫を出して占まわられたので、

姫は大層驚き、みまされたが、一寸法師は、「まあ、何可愛相心」と申して、姫の先に立つて

けました。姫は足にまわせて歩きたまされたが、何處と云つて當も無いので、一寸法師の言

儘に難波へ行く事になりました。鳥羽から舟に乗つて沖に出ますと俄に暴風雨に

舟は未知の風変り、孤島へ吹き着けられて占まれました。「引き返して」と思

たが、風が止まない上に、舟に酔つて居ましたので、一端島に上陸しました。

珍ら点の不思議を見廻して居りますと、何處かふ、赤鬼と青鬼の二人連を

赤鬼は杖を振り、杖を掛つて居り、青鬼は金棒を握つて居ました。二人を

赤鬼を合つて、一寸法師は「何を言ふ」と言ひました。一寸法師を振る口に入

と、一寸法師は鬼の目をうで、鬼が出ると占まれました。「是は曲者だ」と言ひ、今度

鬼が合つて、一寸法師は「何を言ふ」と言ひました。一寸法師を振る口に入

一寸息に呑み込みますと、一寸法師は腹の中で大暴風に暴れ、針の刀を抜いて

まげず、差す通りましたので、赤鬼は「痛ッ、痛ッ」と、輪を引廻り、一寸法師を吐き出

出して、「是れは大変だ」と申して、打出の小槌も金棒も捨てて逃げ行つて占ま

其處で、一寸法師は打出の小槌を拾ひ取つて、「是れが昔かぶくたの」と言つて、

山に地を打ちますと、見ると見ると中に地獄が通つて、一人前の立派な

大部活躍したので、赤腹が「何と居たか、今度はい」赤腹は出て来

とも甘く相な赤腹が雪山出ました。二人は充分御馳走になり、更に「金

來」と言つて打つて、莫大な赤金を打ち出して、再び舟に乗つて都に引

一寸法師は一寸法師を赤腹に打ち出して、再び舟に乗つて都に引

一寸法師は一寸法師を赤腹に打ち出して、再び舟に乗つて都に引

一寸法師は一寸法師を赤腹に打ち出して、再び舟に乗つて都に引

一寸法師は一寸法師を赤腹に打ち出して、再び舟に乗つて都に引

一寸法師は一寸法師を赤腹に打ち出して、再び舟に乗つて都に引

一寸法師は一寸法師を赤腹に打ち出して、再び舟に乗つて都に引

一寸法師は一寸法師を赤腹に打ち出して、再び舟に乗つて都に引



一里も走って松原を通り抜けて、時雨も止まり止んで、松原の  
が地面に映えてゐる。老人はひらりと降りて、草臥ひたふらふ  
に、此の清澄に、一着差止せませう。此方へいと言つた。然し見返つた  
所、用意も無く、此の様な所では、酒の樽も得ない方のに  
と、思ひました。言ひの儘に近寄つて、樽を下ろしますと、老人は  
大きな息を一吹吹出しますと、見事な酒樽が一箇現れました。  
「有む」と言つて、又吹くと、數個の黄金の鍋に浮出盛つた酒馳走  
が、あつた。「牛白はなにか」と不思議に思つて居ると、「是れも一つ  
酒馳走くませう」と、吹くと、十四五の美しい娘が現れて、此  
邊で今を取り出して、掻き鳴らす酒酌までして下りました。商人は  
我を言ひて、飲んだり合へたりすつたり酔つてしまひました。  
「良い機嫌に成つて居ると、冷々とした物を差上げませう」と、此れは珍  
らしい。季節節放れの角を歩いて下りました。此の行届いた款待に、

「趣樂とは此の様な所か、知りな」と思つて、昔悦の情に堪へ  
せんやうだ。老人はと見ると、最早娘の側で大きな舞臺を  
居ました。

娘が申すました。「此の方は私の主人やございしますが、酒目の覺  
なの中に、一藝演じませう」と、老人の膝に一息吹くと、十四五の老  
女すつと現れました。娘は喜び勇んで牛を取ら合ひ、舞へや  
歌へやの恍惚境に、商人も浮かして踊り出さうと思ひました。如  
経つて娘は、「老の身の夢を教へては、此の毒」と申して、其  
を吞んでしまひますと、不意に老人も目を忍んで、勿論、娘を  
吞込んでしまひました。さうして今では最初吹出た道具を、居  
る吞んでしまひました。最後に一つだけ黄金の鍋を残して、「土  
持ちなさい」と言ひました。

二人は、暫くの間に、水つもたふり廻らない口調で談笑して居ましたが

四ノ山の物流りも盡き、日も早、那古の海に沈んだので、

賑申して帰へる波の音の、後磨の浦の岸で、吹くや後の山おろし

凶路の鳥も声々に、暮も跡なく夜も明け、村雨の聞きも今朝

見れば、物風ばかりや残りらん。

七、物風の一部と、諸の官の老人の任言の方へ、次女を清くまゝした

商人は、歡樂の宵を暇寝の夢と結ぶ、花見が去れば端午の餅を

食べ、蚊帳を畳めば月見の宴と食す、門松も豆まきは金踊も踊る

言つた有様で、人益と、夕月が一度に來て、晝と言はず夜と言はず

み明した心地のした。だが残つた物と言へば、鍋一つで了つた。

里に帰へて、此事を語り、生馬仙人と言ふ者が、毎日狂言入り

生駒に通つて居ると言ふ事であった。

西鶴諸國吹より

三一九 三の記

